



ISBN 4-90-0000-00-1

CDD 100 X 1700

社会評論社

定価 1,200円

# ラティシは世界で生まれたのか

ラティシの歴史をめぐっての疑問と回答

# ラティシは

# 世界で

# 生まれた

# のか



社会評論社

社会評論社

[プロローグ]

司会の挨拶 \_\_\_\_\_ 加藤哲朗 8

開会の挨拶 \_\_\_\_\_ ジョヴァンニ・ボミニネド 13

[特別記念講演] ヘゲモニー思想と変革への道 \_\_\_\_\_ 石堂清倫 15  
——革命の世紀を生きて——

[第1セッション] グラムシ——この10年

ジュゼッペ・ヴァツカ (小原耕一訳) \_\_\_\_\_ 44

最近10年のイタリヤにおけるグラムシ研究 \_\_\_\_\_ 44

北アメリカにおけるグラムシ \_\_\_\_\_ 56  
——批判的検討評価——

美玉楚 (カン・オクチョヨ) \_\_\_\_\_ 56

韓国におけるグラムシ研究の動向と課題 \_\_\_\_\_ 75

松田博 \_\_\_\_\_ 75

グラムシ思想のアクチュアリテイ \_\_\_\_\_ 90

片桐 薫 \_\_\_\_\_ 90

日本の左翼文化とグラムシ \_\_\_\_\_ 103

[第2セッション] グラムシとわれわれの時代

田畑 稔 \_\_\_\_\_ 116

「実践の哲学」と哲学の未来 \_\_\_\_\_ 116

飯島京一 \_\_\_\_\_ 124

グラムシ文化論の現代的意義 \_\_\_\_\_ 124  
——グラムシにおける「アメリカニズム」批判についての考察——

黒沢惟昭 \_\_\_\_\_ 133

ヘゲモニーと教育をめぐる諸問題 \_\_\_\_\_ 133  
——「獄中ノート」の思想と現代日本の教育状況——

村上信一郎 \_\_\_\_\_ 145

グラムシの宗教観を問う \_\_\_\_\_ 145

大島一彦 [コメント①]

ポスト市民社会論のエスキス \_\_\_\_\_ 153

川上恵江 [コメント②]

グラムシ市民社会概念の形成 \_\_\_\_\_ 157

小原耕一 [コメント③]

グラムシにおけるバルクス読み変え \_\_\_\_\_ 159  
——「経済学批判序言」をめぐる——

附 論

\_\_\_\_\_ 163

[第3セッション] 現代イタリヤと国際政治

後 房 雄

グラムシのアクチュアリテイをどこにみるか \_\_\_\_\_ 172  
——左翼の自己防衛と自己刷新——

丸山茂樹

バルクス、グラムシと協同組合思想 \_\_\_\_\_ 181

バルコ・ズバラグリ (中嶋 康訳) \_\_\_\_\_ 181

イタリヤの植民地主義 \_\_\_\_\_ 190  
——グラムシと現在イタリヤ人の歴史認識——

ボブ・ジェソツナ (高橋普隆訳) \_\_\_\_\_ 198

統合的経済, フォーダイニズム, ポスト・フォーダイニズム \_\_\_\_\_ 198

崎山政毅 (コメント①) \_\_\_\_\_ 205

ラテン・アメリカの歴史研究の視座から \_\_\_\_\_ 205

いいだもも (コメント②) \_\_\_\_\_ 208

グラムシと共にグラムシを超えて \_\_\_\_\_ 208

G・ヴァツカ (コメント③) \_\_\_\_\_ 210

現代イタリヤ政治の特徴について \_\_\_\_\_ 210

質疑応答 \_\_\_\_\_ 212

[全体集會] \_\_\_\_\_ 227

## 司会の挨拶

加藤哲郎

(一橋大学)

今年、1997年は、20世紀イタリアが生んだ知的な巨人であるアントニオ・グラムシが亡くなって、60年になります。日本では、1987年に没後50周年のシンポジウムが開かれて、それから10年たちました。没後50周年の会を開いた人達の中から、有志が申し合わせて、今回130人以上の呼び掛け人、賛同人によって実行委員会がつくられ、本日この会議がもたれることになりました。わたくしは、イタリアの専門家でも、グラムシの研究者でもありませんが、その呼び掛け人の一人として、またアントニオ・グラムシから知的刺激を受けてきた研究者として、本日、司会をさせていただきます。

1987年から10年たちましたが、その間、世界的には非常に大きな変化がありました。1989年にベルリンの壁が崩れ、冷戦が終焉しました。91年にソ連が崩壊しました。マルクス主義や社会主義の威信は全体として低下しました。しかし、アントニオ・グラムシは、社会主義、それも第三インターナショナルの系譜に属しながら、なお説かれ続け、また国際的にはグラムシ・ブームと呼ばれるほどに、いま脚光を浴びている理論家、思想家であります。1997年11月というこの月は、同時にロシア革命の80周年でもあります。私たちはここで、ロシア革命の80周年ではなく、なぜ、アントニオ・グラムシの没後60周年を祝っているのでしょうか？

10年前の会も、この会場で行なわれましたが、その際は、イタリア文化会館から会場をお借りする形だったのですが、今回の60周年のシンポジウムは、イタリア文化会館と、私たち日本側の実行委員会とが共同主催ということになりました。しかも今回は、イタリア大使館の後援をいただいております。本日は、ジョナサン・ドミニク大使にも御列席いただき、のちほど挨拶

させていただきます。

10年前の前回も、中国、韓国、イタリア、西ドイツ、イギリスからの参加者、国際シンポジウムの形がとられました。今回も、イタリアからグラムシ研究所長のジュゼッペ・サツツカ教授、同じくイタリアからもウーノ、グラ研究者のズバラグリさん、アメリカから国際グラムシ協会の事務局長であるブレンティ・ノーブルダム大学教授、韓国からソウル大学講師の姜玉堯さん、それに、イギリスからはランカスター大学のボブ・ジェソップ教授が出席しております。

また、ほどグラムシ・ブームといいましたが、わたくしのグラムシについての情報は、最近ほとんどインターネットから得ております。インターネットの世界に入りますと、グラムシ研究所のホームページがあります。国際グラムシ協会も、ニュース・レターをインターネット上に公開しております。アメリカのジョン・キヤメット博士は、リソーシズ・オン・アントニオ・グラムシという立派なホーム・ページを開いて、世界中からアクセスできるようになっています。そこには、1922年から1996年までに刊行された、10353点のグラムシ関係文献の、言語別、年代別による出版刊行の統計ができております。

言語別に言いますと、イタリア語が6,077点で58.7パーセントを占めます。つまり60パーセント近くがイタリア語ですが、あとの240パーセントは、他の言語であります。英語が1,206点で約12パーセント、フランス語が506点で5パーセント、スペイン語が430点で4.1パーセント、そして日本語は、ドイツ語とともに約400点で、3.9パーセント、約4パーセントというふうになっています。世界のランキンズでいうと、日本は、グラムシについての著作が刊行されている5番目、ないし6番目ぐらいの先進国ということになります。もちろんグラムシ自身の著作が27ヶ国で翻訳されており、キヤメット博士のホームページには、32ヶ国語のグラムシ関係文献資料がでています。そのうち日本は、グラムシに関心を持ち続けているという意味では、世界の最先端とはいわなくても、先端の方になります。

興味深いことに、年次別の統計もでていますが、イタリア語でも、英語圏でも、そして日本でも、10年前と現在のあいだで、グラムシに対する世界的関心は、衰えておりません。むしろ国によっては、あるいは言語

によつては、<sup>新刊</sup>加わつてきている図々もあります。今年の没後60周年には、イタリヤでは郵便切手が発行された他、多くの集會が開かれ、10月には、イギリスの歴史家エリック・ホブズボームは、英語圏で20世紀に一番引用

参照されたイタリヤ人は、ムツソリーニでも、クローチェでもなく、アントニオ・グラムシだと言っています。その統計的根拠もあるようです。英語圏では、20世紀のイタリヤ人の代表がグラムシになっていることですが、日本ではどうでしょうか。日本のイタリヤ研究者の方にぜひ統計をとつてもらいたいと思いますが、どんなに控え目に見積もつても、おそらくベストスリーには入るイタリヤ人、日本人にもつとも親しまれているイタリヤ人になるのではないかと思われます。言い換えれば、グラムシを通してイタリヤ文化に触れ、イタリヤを識るといふ機会が、私たち日本人にとつて、これまでも多くあつたし、今後ますますあえていくだろうと思われまふ。

開會の挨拶ですので、多くを話すわけにはいきませんが、私は政治学を専攻しておりますので、政治学の方でなぜグラムシがいまだに読み継がれ、マルクス主義の衰退といわれる中でも生き続けているのかについて、一言二言申し上げておきたいと思ひます。

一つは、いうまでもなく、ヘゲモニーとか、歴史的プロツクとか、受動的革命とか、有機的知識人とか、障地戦と機動戦、実践の哲学、アメリカニズムと世界の歴史と現実、そして近代社会の20世紀的な変化、変容を有効に解明するため用いられていることです。例えばヘゲモニーという概念、あるいは受動的革命の概念を用いて、各国の政治や社会を分析する仕事や、世界ロバート・コツクスとか、ステイナーソン・ギルとか、イマニエール・ウオーラスティンソンのような人は、明示的にアントニオ・グラムシを使って、国際政治におけるヘゲモニーの問題を論じています。だいたいのアメリカ経由になか最高の帝国主義、一番強い帝国主義、ザ・ストロンギスト・インペリアルイズムと同じように扱われます。

けれども、例えばメイソン・ストリームのハーバート大学ロバート・コハイ

のヘゲモニーについての著書を読んでいくと、そこにはちやんとグラムシについて一章が割かれており、グラムシのヘゲモニーというカテゴリーを破れて、通常言われているヘゲモニーの交替とか、アプター・ヘゲモニーという問題を論じていることがわかります。言い換えれば、グラムシが用いた概念が、普通名詞として、ドミナントなスクールを含む政治学の領域に浸透してきています。

一つは、既存の概念、あるいは日常語であつたものを、グラムシが鑄造して、それに新しい意味を付与することによつて、社会科学あるいは政治学の有意義な概念になつてきているものが、多数あります。もともとヘゲモニーや受動的革命の概念も、グラムシがイタリヤの文化の中から、マキアヴェリやソレル、クローチェ等々の対決の中から鑄造した概念です。例えば、有名なグラムシの「国家とは政治社会プラス市民社会であり、強制的な暴力を以てヘゲモニーである」というテーゼは、それまでの国家についての概念を、大きく変化させました。それと同じような意味で、私たちは、知識人とか、知識とか、教育とか、あるいは道徳などという日常語であり普通名詞であるものを、グラムシの論理的な媒介と意味付与を経て、新しい概念として再把握することができるようになりました。

私たちの世界で言いますと、実は政治という当たり前の言葉がそうです。政治というものが、従来のマルクス主義では、上部構造とか、階級闘争とか、国家についての事象として狭く扱われていたものを、グラムシは、日常生活の世界の中に組み込み、さらに経済や社会や文化で媒介することによつて、あるいは道徳や倫理の領域におよぼすことによつて、政治の意味そのものを、生き生きとしたライヴリーなものにし、日常生活の中から生まれてくる政治的なものという意味に、新たに矯正していったのです。

ちなみに、知識人との関連で言いますと、この会を準備された日本の実行委員会の片桐薫さん、あるいはここで通訳をなさっている小原耕一さんや会場を準備した方々の多くが、アカデミズムとか研究所とは関係のない、在野でグラムシを読み続けてきた人達であります。そういう意味では、この方々は、古い伝統の意味では知識人ではないけれども、アントニオ・グラムシの意味では知識人であり、まさにこの会を準備し成功させるということによつて、みずから有機的知識人になつていく、という関係になります。

こう考えますと、私たちがこれから、今日、明日と行ないますこの会の目的も、グラムシに学びながら、どのようにしてグラムシのように考え、グラムシのように新しい現実にはプロローチするか、ということになるかと思えます。グラムシ的な射程をもって21世紀の問題に立ち向かう、そのためには、グラムシが当時のイタリアの現実、マルクス主義の理論状況の中で、自分の概念を鮮直していったように、私たちが、没後60周年にあたるこの年、アントニオ・グラムシの残したものを、私たちがなりに読み換えて、鮮直して、そして豊かにしてゆくことが、この会議の大きな目的になるだろうと思います。そのことが、日本とイタリアとの新しい友好関係、日本人の新しいイタリア文化の理解にもつながることになると思います。

長くなりますので、わたくしの語はこのくらいにしまして、これから全体としての会の職事に入っていきたいと思えます。

最初に、先ほど申し上げましたように、本日の会を後援という形でささえていただいております、イタリアのジョヴァンニ・ドミニク駐日大使をご紹介いたします。

## 開会の挨拶

ジョヴァンニ・ドミニク

(駐日イタリア大使)

本日、アントニオ・グラムシのシンポジウムを開催することは、私にとりて格別の喜びであります。シンポジウムは明日も引き続きおこなわれ、ここに集まる学者・研究者の方々が、グラムシというこの著名な思想家で政治家についての認識を、多面的に深めようというものであります。

このご出席のグラムシ研究所長ゲツカ教授、日本側のシンポジウム実行委員会の皆さん、ならびに今回の交流の成功を保障すべくこのシンポジウムに積極的に参加して下さったすべての学者・研究者の皆さんに、心から感謝の意を表明いたします。

シンポジウムがここイタリア文化会館のホールでおこなわれ、そして、文化会館がアントニオ・グラムシの思想の研究にたいする鋭い感性を示して、イタリアと日本に存在する古くからの堅い文化的きずなをさらに強化するために、さらなる貴重な機会を私たちに提供してくれたことも、私にとりて喜ばしいことであります。

アントニオ・グラムシの思想的学問的な評価を下すことは、私の責任に属するものでないことは、申すまでもありません。ここにおられる学者・研究者の方々が、非常に真摯な討論を重ねたうえで、評価されるでありましょう。ただ、ここでひとこと想起させていただきますと、1937年8月にベネテック・クローチェは「イタリアにおける理論的マルクス主義は如何に生まれ如何に死んだか」という論文の結びで、「理論的マルクス主義は1900年ごろイタリアおよび全世界で枯渇した」と書いて、重大な評価の誤りをおかしました。事実、1929年から1933年にかけて、イタリア共産党の創立者の一人でもある政治家、アントニオ・グラムシは、ファシストの監獄のなかで、ファシ

グラムシは世界でどう読まれているか

2000年1月31日 初版第1刷発行

編者——グラムシ没後60周年記念国際シンポジウム

装幀——佐藤俊男

発行人——松田健二

発行所——株式会社社会評論社

東京都文京区本郷2-3-10

☎03 (3814) 3861 FAX03 (3818) 2808

<http://www.netputa.ne.jp/~shahyo>

印刷——ミツヲ印刷+東光印刷

製本——東和製本

ISBN4-7845-0386-2